

今年も、多数の学校の参加のもと、全国中学校・高等学校ダンスコンクールが開催されました。中学校の部には 23 作品、高等学校の部（団体部門）には 43 作品、高等学校の部（ソロ・デュエット部門）には 12 作品のエントリーがありました。どの作品にも、その学校ならではの個性、ダンスに対する強い思い、練習の積み重ねが刻まれており、審査をしている私たちも、数々の素晴らしい作品に大変感動致しました。またダンスのすばらしさ、多様性、そして可能性をあらためて感じる貴重な機会となりました。このような素敵な時間を私たちに与えてくださり、そしてまた共有してくださったみなさんに心より感謝いたします。

さて、みなさんにはコンクール当日にも講評をお伝えいたしましたが、あらためてここにその内容を総評として記します。これらを参考に、今後の活動のさらなる展開へとつなげていただければ幸いです。

審査基準について

本コンクールの審査は、以下の 5 つのポイントを基に行いました。

1. 身体が良く訓練され、鍛えられているか。
2. 主題にふさわしい表現が行われているか。
3. 作品の展開、構成に工夫が見られるか。
4. 作品全体が独創性に溢れ、何らかの魅力があるか。
5. これらの総合的な完成度があるか。

群舞作品について

1 について

身体的な技術面においては、年々向上していると感じます。設定した表現、テーマを具現化するための十分な技術力を備えていると感じられる学校が多く見られました。

2, 3, 4 について

テーマの選定については、自分の内面を問うもの、社会性を反映したもの、自然現象や民族性を扱ったものなど、非常に多様なテーマ、またこだわりが見られました。またアプローチについても、物語的、象徴的、抽象的など、様々な手法がありました。

上位の作品は特に、それぞれのテーマに沿った動きの選択、展開の工夫、そしてこだわりの追求が際立っていました。テーマへのこだわりを深めることは、結果的に独創性、オリジナリティを深めることに繋がります。本コンクールは、創作のコンクールですので、型にはまらない新しい表現への挑戦を推奨します。

例えば、群舞作品でよく使われる手法として、前方に対する表現、中央の使い方（高いタワーやリフトなど見せたいものを中央に配置する傾向）、シンメトリーな構成、ラストに向かって盛り上げる構成（特にラスユニと言われるユニゾン）などがありますが、これらの手法は効果的に使えば確かに有効です。但し、それ以上に、自分たちが選定したテーマや作品にそれらが本当に必要なかを再考し、各作品を具現化するために必要な自分たちだけの方程式、表現方法を見つけ、掘り下げることが、新しい表現、オリジナリティのある作品に繋がる、より重要な鍵と考えます。

5の関連事項について

装置、衣装の使い方

今年はテーマに即した装置（小道具）や衣装の工夫が多く見られ、特に衣装がテーマを鮮明に浮かび上がらせる演出として効果を上げている作品が目立ちました。一方で、小道具や衣装が動きや構成を制限してしまい、作品全体の流れをつくりにくくしているのではないかと感じられる例もありました。

音の使い方について

音の編集スキルは年々向上しており、効果的に音を使っている作品が多く見られました。

一方で、3分50秒という限られた時間の中で構成を展開するにあたり、音によって物語や作品の流れを運ぼうとする意図が強く出て、作品の起承転結といった流れが滑らかに感じられなかったり、急にクライマックスのように聞こえてしまう作品も一部に見受けられました。また、ダンスや動きの表現よりも音によって感情や場면을盛り上げようとする狙いがやや前面に出すぎているように感じられた作品もありました。

また歌詞のある音源を使用している作品がいくつかありましたが、言葉は非常に強い意味性を持つため、歌詞から入ってくる内容が観客にどのように伝わるかを考慮する必要があります。歌詞のある楽曲の使用も効果的に使用すれば問題ないですが、動きよりも前に歌詞が強く観ている人に入ってきた場合、動きが説明的になってしまう可能性もあります。選曲の際には、この点も考慮すると良いでしょう。

ソロ・デュエット作品について

ソロ・デュエット部門では、大変高い技術力を持つ作品が揃っていました。その中で上位の作品は、技術に加え、テーマに沿った動きの選択、動きの解釈、存在感など、総合的に完成度の高い作品が評価される傾向にありました。

群舞部門と同様、ソロ・デュエット部門においても、テクニックの向上は著しいですが、そのテクニックを使って何を語るか、どのような世界観を表現したいかという点を、より深く追求することで、オリジナリティのある作品が生まれると思います。今後は技術に加え、さらにバリエーションに富んだ様々な手法の作品がエントリーされることを期待しています。今回群舞作品に出場した1，2年生の皆さんも是非来年はソロ・デュエット部門も挑戦してみてください。

最後に、本コンクールに参加してくださった生徒のみなさん、日々指導に尽力された先生方、そして日頃より温かく支えてこられたご家族ならびに関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

生徒の皆さんには、ここで得た経験が糧となり、みなさんの、さらに豊かな表現へとつながっていくことを願っています。若い世代ならではの柔軟な発想と感性で、これからも新たな表現の可能性に挑戦し続けてください。

審査員一覧

◎岩淵 多喜子（日本女子体育大学准教授）

宮 本 乙 女（日本女子体育大学教授）

加藤 みや子（舞踊家）

鴨志田 加奈（昭和音楽大学准教授／日本女子体育大学非常勤講師）

近 藤 良 平（振付家／ダンサー）

松 山 善 弘（日本女子体育大学名誉教授／福島学院大学教授）